

Title	福澤諭吉の「西洋事情」
Sub Title	Fukuzawa's SEIYO-JIJO ('Things Western')
Author	間崎, 万里(Masaki, Masato)
Publisher	三田史学会
Publication year	1950
Jtitle	史学 Vol.24, No.2/3 (1950. 10) ,p.89(221)- 105(237)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	福澤諭吉五十年忌記念
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19501000-0089">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19501000-0089</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 福澤諭吉の「西洋事情」

間 崎 万 里

一時軍國的威壓の下に影を潜めていたかに見えた我が福澤精神は、敗戦後、勃然として再起し、こゝに再びその眞價を問われようとしている。これに讃仰・隨喜するものも、はた峻嚴なる批判をもつて蒞もうとするものも、ともにその著作について、問題の鍵を握るべきである。福澤全集十卷（一九二六）および續福澤全集七卷（一九三三—三四）は、その資料の大部分を提供して呉れる。この外その後に見えられた資料および諸家の論評は、本誌所載の文献目録について見るべきであるが、何人も福澤研究に着手するにあたり、先ず最初に讀むべきものは「福澤全集緒言」（福澤全集第一卷）および最も簡單で要を得たる小泉信三氏の「福澤諭吉」（アテネ文庫 弘文堂 昭和二三年）である。

前者は福澤が四十年にわたる著述又は反譯を一括して刊行するに際し、みずからその思想の成長、見聞の擴大、その著作に對する用意、その成果などについて語つた、言わば「文筆上の自叙傳」（小泉信三氏解題「民情一新」常松書店 昭和二年、一頁）ともいうべきものであつて、數多き先生の著述の全貌は、美しい縮圖としてこゝに浮き出しているからで

ある。

その中に記すところによれば、「扱廣く世間を見渡すに、今日の日本は昔日の日本に非ず、所謂新日本と稱して舊來の舊觀を改め、文明諸國と交際して敢て遜色なきに至りたれども、新日本は一朝の誕生に非ず、因果の理路を尋ね來れば近きは四十年、遠きは四百年の其上にも越えて變遷沿革の端緒を見出すことある可し。左は云へ兎に角に日本が舊物破壊、新物輸入の大活劇を演じたるは、即ち開國四十年のことにして、其間の筋書と爲り臺帳と爲り、全國民をして自由改進の舞臺に新様の舞を舞はしめたるもの多き中に就て、余が著譯書も亦自から其一部分を占たりと云ふも敢て疚しからず、余の放言して憚らざる所なり」(福澤全集緒言)と。福澤の自負する通りである。

その著述中、最も多く影響を與えたものは、「西洋事情」三篇十卷(一八六六—六九)、「學問のすゝめ」十七篇(一八七二—七八)、「文明論之概略」(一八七七)、「通俗民權論」(一八七八)、「通俗國權論」(一八七七)、「時事小言」(一八八一)などであると言われているが、中でも「西洋事情」は「余が著譯中最も廣く世に行はれ、最も能く人の目に觸れたる書にして、その初篇の如き著者の手より發賣したる部數も十五萬に下らず、之に加ふるに當時上方邊流行の偽版を以てすれば、二十萬乃至二十五萬部は間違なかる可し」(福澤全集緒言)というのであるから、驚くべき賣行きであつて、「學問のすゝめ」とともに、當時のベスト・セラーズであつた。

海外では、すでにフランス革命の當時、思想家の一派に「アンシクロペヂスト」すなわち百科全書家というものがあつり、彼等の合理主義的啓蒙思想を盛り込んだ百科全書は度々政府の彈壓を蒙り、共同編集者のグランベールが途中で辭任し、ヂドロロー一人最後まで踏しまつて一七七二年に最後の一卷を出だして全三十四卷の完成を見たるこの大辭典は、

著者が最後まで貧困であつたにも拘らず、出版書店をして二百萬フランを儲けさせ、約四千部數萬卷を賣り盡したといふのにも比せらるべきで、西洋事情は我が「開國匆々上下共に適する所を知らず」殆んど無學に近く白紙の如き日本人が維新の大事業を完成して、「扱善後の一段に至り鎖國攘夷の愚は既に看破して開國と決斷したれども、國を開いて文明に入らん」として何等の典據を知らず當惑したる折柄、「目に觸れたるものは近著の西洋事情にして、一見是は面白し、是れこそ文明の計畫に好材料なれと、一人これを語れば萬人これに應じ、朝に野に苟も西洋の文明を談じて開國の必要を説く者は一部の西洋事情を座右に置かざるはなし、西洋事情は恰も無鳥里の蝙蝠、無學社會の指南にして、維新政府の新政令も或は此小冊子より生じたるものある可し」とするまでに、萬人必讀の著述となつていたのである。西洋事情もフランスの百科全書と同じく正に啓蒙の役目を日本文明のために果たしたものであつた。

本書の名に似寄つたものに、新井白石の「西洋紀聞」という本がある。それは徳川幕府が一キリシタンローマ人シドチなるものの取調に關連して得たる西洋およびヤソ教に關する記事であつて、一七一五年、中御門天皇の治世、七代將軍徳川家繼の代、有名な八代吉宗の將軍職につく前年に完成されたらしい（岩波文庫版序文）ので、西洋事情の初篇の第一卷を出したる一八六六年より百五十一年前の書物であるが、西洋紀聞が刊行せられたのは一八八三年のことであるから、西洋事情よりも十七年後になつて世に出でた譯で、「紀聞」の當時における新知識もすこぶる簡易疎雑なものであつて、西洋文化に對する理解の程度も、「事情」とは到底比較にならぬものであつた。<sup>(四)</sup>白石の「紀聞」が一般には近ずき難い秘書であつたのに反し、福澤の「事情」は、當初から公開的なものなのであつて、みずから「畢竟唯一時」と謙遜して語つてはいるが、「新聞紙の代用に供する」（西洋事情初篇卷之一小引）ことにもなつたものなので、世間に與えたその

影響は、非常なものであつた。それは時勢の必要に投じたためであつたにしても、これほどまでに流行したのは、一つに福澤の識見と文章によるものであつた。

註(一) 福澤の著述には句讀點乏しきも、以下本文の引用には便宜上これを加えることとした。

(二) 「學問のすゝめ」(岩崎書店 一九五〇年) 昆野和七解題には資料の發見について最新の記事が載つていたので、福澤研究者が見逃すべからざるものである。

(三) 例えば、西洋事情初篇卷之三(明治二年十二月再刊) および二篇卷之四(明治三年十月刊)の卷末に掲げたる「慶應義塾藏版目錄」三十種の書目の中、偽版を註記してあるものは次ぎの通りである。

西洋事情 初篇再版 三冊 上方に偽版三四様ありて方今も偽本を賣買せり

西洋旅案内 二冊 これも偽版二三様あり或は事情次篇などと偽れり

條約十一國記 一冊 これも偽版二様はかりあり偽本の蓄積盛なるよし

西洋衣食住 一冊 例の如く偽本澤山

雷銃操法 初篇 一冊 此書も偽版の噂あり他の例に従へば實説ならん

同 二篇 一冊 勿論右同様なり

その偽版の一つとしては、福澤論吉原輯黒田行次郎校正として、「事情」の初篇三冊を上中下に改め、これに本當の蛇足とも見るべき「西洋事情増補」の題を附して吉野屋仁兵衛等の慶應四(明治元)年刊行のもの、或はこの増補だけを別冊として表紙には「西洋事情附録」と題し江戸須原屋茂兵衛、浪花松邑九兵衛、京都佐々木惣四郎の刊行したものがあり、また表紙には「西洋旅案内」上下とし、中味には「西洋事情次篇」とし實は旅案内を印行した不都合なものも殘存している。

(四) その中には、五大洲をといつて「四つにはノバルト、アメリカ。蕃語ノバルトといふはこゝには、南といふ」とし、「五つには、ソイデ、アメリカ。ソイデといふは、こゝに北といふ」と南北が逆となつてゐる如きがある(中卷の初)。

福澤諭吉は、今の曆で一八三五年一月十日大阪（今日の堂島の地）に生れ、一九〇一年二月三日東京の芝（今は港区）三田山上で死んだ。享年満六十六歳。生涯に三度洋行した。第一回は木村攝津守の従僕として咸臨丸で渡米し、ついで幕府の通譯（反譯方御雇）として遣歐使節竹内下野守一行に随伴してヨーロッパへ行き（「福翁自傳」慶應通信教育文庫版一五―一二八頁、以下引用はこれによる）第三回は再度の渡米であつた。これを年代で示せば、

渡米（第一次）一八六〇（萬延元）

渡歐 一八六一―一二（文久元）

渡米（第二次）一八六七（慶應三）

となる。

當時の歐米が福澤および同行の人達の眼に如何様に映じたかは、福翁自傳や使節の日記などに示されているが、それ等を見事に綜合した尾佐竹猛の幕末遣外使節物語「夷狄の國へ」（萬里閣書房 昭和四年）に面白く示されている。彼等は異國の風物に接し、事毎に瞠目驚嘆している。例えば、第一次渡米の途次、ハワイ國（當時は獨立國）王に謁見した村垣淡路守の即詠に、「御亭主はたすきがけなり、奥さんは大はだぬきて珍客に逢ふ」（同書二七頁）。米國會に赴いては「例のものゝ引筒袖にて大音に罵るさま、副統領（上院議長として）高き所に居る體抔、我日本橋の魚市のさまによく似たり」（村垣日記、上掲書引用八三頁）と觀察し、或は米國大統領の官邸に招かれ、館内を一巡して、「二階より上は大統領の住

居成よしにてゆかず、下の段は表座敷の體なり、先に謁見の席を第一の廣間とし、中に廊下を設け西側に六七席有、更に人無く、我寺院の無住の本堂に似たり、所々の鴨居の上に白石もて造りたる首あり、代々の大統領の首なるよし、我國の刑罰場に見しにひとし」(同書七五頁)とし、渡歐の際にも福澤自から記している通り、「或るときに三使節中の一人が便所に行く、家來がボンポリを持って御供をして、便所の二重戸を開放にして、殿様が奥の方で日本流に用を達す其間、家來は袴着用、殿様の御腰の物を持って、便所の外の廊下に平き直ひらてチャンと番をして居る、其廊下は旅館中の公道で、男女往來織るが如くにして、便所の内外瓦斯の光明晝よりも明かなりと云ふから堪らない。私は丁度其處を通り掛つて、驚いたとも驚くまいとも、先づ表に立塞がつて物も言はずに戸を打締めて、夫れからそろ／＼其家來殿に話したことがある。」(自傳一一八一—一九頁)というような知識の程度である。この西洋事情初篇は二度目の洋行の結果得られた新知識を土臺として作られた(自傳一二三頁および全集緒言)ものであつて、この一行は先ずフランスにつき、それから英・蘭・普・露・葡などの諸國を歴訪し、自然科学的のものにはさほど驚かなかつた福澤も、政治・社會の諸制度に接しては、見るもの聞くもの新奇ならざるはなく、その由來および效用を聞いて心酔しないものはなかつた。そうして驚くと共にこれを羨み、これを我が國へ移植しようと欲した。パリの旅館において福澤が書いた和歌がある。

「植えて見よ、花のそだたぬ里はなし、心からこそ身はいやしけれ」

と、文化移植の可能を力説している。石河氏によつて、今日傳わつた福澤の唯一の和歌と誤傳せられたこの歌は、西川如見の「百姓囊」<sup>(二)</sup>、大槻磐水の「蘭學楷梯」<sup>(三)</sup>の中にも出ていたので、實は徳川時代の蘭學者の間に知られていた「古歌」であろうという。それは兎もあれ、福澤が書いたことには間違ないので、その意圖は想像されるのである。

福澤の「反譯時代」(一八七三、明治六年の頃まで―高橋先生の「福澤先生傳」一九六頁)を通じて最も有益でかつ「最初の著述」<sup>(四)</sup>とも見るべき「西洋事情」は、その初篇を一八六六年の舊三月から公務の餘暇をもつて稿を起し、同六月下旬に脱稿して同年刊行し、外篇は一八六七年舊六月第二次渡米から歸つて起稿し、同年刊行を見、ついで二篇は一八六九年秋刊行せられたもので(何れも序言による)、前後四年にわたり、我が國難と維新の變革の際に、つぎつぎに繼續刊行せられたものである。

西洋事情は初めには初篇三冊、二篇三冊をもつて構成する豫定の下に執筆されたようであるが(初篇目次)、初篇出版後二篇との間に、外篇三冊を挿入する必要に迫られ、「本篇總目の順序に従て其事を記せんが如きは唯各國の史記政治等の一端の科條を知らしむるのみにて未だ西洋普通の事情を盡すに足らず」(外篇題言)とし、初篇の最初の一冊を備考として、政治・經濟の實狀、兵制・教育・社會百般の諸制度、近代科學の施設等について歐洲文明の概念を與えんとし、前述の如く、歐洲旅行中に見聞したるところのものを手録し經濟論等の諸書を引いて論述したものであるが、この外篇は後述のチェンバーズの經濟書から反譯し、諸書の抄譯をもつて補つたものであることは、外篇の題言に記すところであつて、高橋誠一郎先生の二著、「福澤先生傳」(改造社 昭和八年)および「福澤諭吉」(實業之日本社 昭和一九年)に詳しく考證せられている。さらに西洋事情二篇においても重ねて備考としてその第一卷にブラックストンの英法およびウエーランドの經濟書よりの抄譯を加え(二篇例言)、かくて都合他の五冊(初篇二―三、二篇二―四)が本文をなしている。本文は各國を何れも史記(歴史)、政治、海陸軍(軍備)、錢貨出納(經濟・財政)の四項に分ち、「史記以て時勢の沿革を顯はし、政治以て國體の得失を明にし、海陸軍以て武備の強弱を知り、錢貨出納以て政府の貧富を示す、蓋し此四者既



に世人の眼目に觸ればこれに由て略ぼ外國の形勢情實を了解し」(初篇小引)うるからである。しかしこれ等は英米刊行の歴史・地理數本の中から抄譯して編集し、本邦と通信の國を先にし漸次他の國に及ぼそうとしたものである。しかるに、最初の計畫中、米・蘭・英・露・佛の諸國を記述したるに止まり、他(葡・獨)は未完成に終つてゐる。

註(一) この和歌はレオン・ド・ロニーの佛文「日本文集」の中から「福澤先生遺墨集」第一〇一圖と石河幹明著「福澤諭吉傳」

第一卷三二九頁に轉載されているが、「その毛筆の日本字は紛れもない先生の筆蹟(中略)であるから其の三十一文字も先生のものであらう」(石河「諭吉傳」第一卷四五二頁)と。しかしその誤りであることは、石河氏を助けた右の傳記編纂所員富田正文氏のその後の發見である。序でながら「史學」復刊第一號における私の引用の誤もここに訂正しておく。

(二) 西川如見「町人囊・百姓囊・長崎夜話草」岩波文庫版一六一―一六二頁に出ず。同所に「古歌」と記してある。

(三) 「馨水存響」中の「蘭學楷梯」下「比音」の項一六頁にも出てゐる。

(四) 岩波文庫版「文明論之概略」石河幹明解題一頁。もちろん福澤は第一次渡米後増訂「華英通語」(一八六〇)を出版しているが、これは純粹の著述ではなく、漢英辭書に片假名で英語の發音と中國語の和譯を加えたもので、みずから「翻譯」(自傳一一五頁)とし、或は「是れは翻譯と云ふ可き程のものに非ず原書の横文字に假名を付けたるまでにして事固より易し」(全集緒言)とも言つてゐる。「唯原書のVの字に正音に近からしめんと欲し、試にウワの假名に濁點を附けてヴ」と記したるは當時の思付の新案と云ふ可きのみ」(全集緒言)と記しているが、この思付が今日廣く行われている。

(五) しかし、西洋事情の稿本はすでにその以前から出來ていて、同社同人の間にはこれを示されていたので、三箇月で脱稿したというのは、右の稿本の修正増補に要した期間と見るべきだと石河氏は説いている(諭吉傳第一卷四四六―四四七頁)。

三

「西洋事情」の中で、福澤の反譯振り或は著作の技巧をはつきり示しているのは、「外篇」である。この篇は三卷全

部がいわゆるチャンブルの「經濟書」<sup>(1)</sup>の前半(「ソサイヤル・エコノミー」の部分)を自由に反譯し、これに他書から補充した部分(第一卷に二項目、第三卷に三項目)を加えているが、この補足的の部分は、注意深く本文より一字下けて、それとの混同を避けている。

その目次にしつて見ると、Introduction—Social Organization (人間) The Family Circle (家族) Individual Rights and Duties (人生の通義及び其職分) Civilization (世の文明開化) Equality and Inequality—Distinctions of Rank (貴賤貧富の別)<sup>(2)</sup> (この間に、ワットとステフヘンソンの傳が這入る)<sup>(1)</sup> Society of Competitive System. Objections to the Competitive System Considered (世人相勵み相競ふ事) Division of Mankind into Nations (人民の各國に分ることを論ず) Intercourse of Nations with Each Other (各國交際) Origin of Government (政府の本を論ず)<sup>(1)</sup> (以上卷之二) Different Kinds of Government (政府の種類) Laws and National Institutions (國法及び風俗) Government Functions and Measures (政府の職分)<sup>(1)</sup> (以上卷之二) The Education of the People (人民の教育) The Nature of Political Economy (經濟の總論) Origin and Nature of Property (私有の本を論ず)<sup>(1)</sup> (この間に、勤勞に別あり功驗に異同あるを論ず、發明の免許、藏版の免許が這入る) The Protection of Property (私有を保護する事) Protection of the Profits or Fruits of Property (私有の利を保護する事)<sup>(1)</sup> (以上卷之三) 原文には、さらに「ポリチカル・エコノミー」の部分としての Effects of a Partition of Property 以下、最後の Taxes に至るまで十九項目があるけれども、それ等は譯されてない。

譯されなかつたことの理由はその部分に相當するものは、すでに他書<sup>(3)</sup>から福澤の學友神田孝平が譯した「經濟小學」があるからで、「余が此等の全部を譯せざるは敢て其勞を憚るに非らず抑方今文化益開け翻譯の書陸續世に出ると雖ど

も固より彼の百科萬端の學術有限の力を以て無限の書を読むが故に假令吾社の翻譯を業とする者各科目を分ち力を陳て之を譯するとも其全備を期するが如きは甚容易ならず況や今大同小異の書に於て無益の勞を費さんより寧ろ其力を他書に用ひ務て新奇有益の事件を譯し廣く之を世に布告せんには如かず」(外篇卷之一題言)として、分業の便利に従い、「經濟小學」の併讀をすすめているのであつて、類書の譯書が徒らに多く、あつてほしい書物の反譯の出ることの少ない現在においても、味うべき言葉である。

以上に示した目次の邦文としての取扱方の巧妙さと、當時の語學力を窺いうるのである。かつて板倉卓造先生は、『學問のすゝめ』と Wayland's Moral Science』について研究せられた中に、「先生は單に原書の要領を採るに止まり、決して字句の反譯をしてゐられるのではない。否な各論の論述は先生独自の說にして、巧妙なる譬諭と、適切なる例話を以て、縦横に筆を驅りつゝ Wayland の原文は何時の間にか跡方もなく消失せて、先生の名文名論獨り天馬空を行くの慨がある」とし、之を「原文と對讀するに於て、先生の論法、先生の筆力、先生の着想、正に古今獨歩の感を懷かしむるものがある」と。正にその通りであつて、「學問のすゝめ」の前階として、「一層反譯的部分の多い「西洋事情」においても、當て嵌ることである。更に煩を厭わずその一節を對比して、研究の便に資しようと思う。外篇卷初の部分(「人間」の冒頭のところ)を見るに、

1. Man, in being placed upon the earth 人の生ずるを by his Divine Creator, 天より has been invested 之と與ふこと with certain powers 氣力を以つて and 之と附する dispositions 性質を以つて which bear a relation to the qualities of the external world, この氣力と性質に由つて、外物の性に應じ and appear as designed to enable him to live 以つて身を全うし and thrive in this transient scene of being. 朝露の命

を終ることを得るなり。

2. His happiness, as far as that scene of existence concerned, depends on the success with which he can adapt himself to each accidental circumstance as it arises, and the skill with which he applies himself to the improvement of those circumstances. (以上のところが) 外物の來るに從ひ機に臨み變に應じて其處置を施し一朝の患なく亦終身の憂なし是れ所謂人間の幸福なれば、*He is not offered ready means of indulgence, 妄の喜怒哀樂の情に逐はれ血氣の情欲に制せられることなく but called upon to observe that, by a due degree of mental and bodily exertion; 適宜の心身を用ひ he may supply himself with what will satisfy his wants 我望む所を達し我好む所を得し and his tastes. 自から満足せしことを求むべし。* This is simply equivalent to an intimation from above, 之を概して言くば *that he is designed to be AN ACTIVE BEING. 人は爲すべしとある可き造物なり。* He must work that he may enjoy. 凡そ我に得ることあらんと欲する者は先づ我心身を勞せざる可らず。(この句は邦譯ではいぎの文章の後(177)) Even the physical evils with which he is surrounded 寒熱痛痒風雨水火の如き人に害あるに似たれども appear as part of the appointed means for sustaining the activity of the wonderful machine forming the human constitution. 却つ人の氣を引立其働を勵ますの一大助なる可し。 We struggle with difficulties, 千辛萬苦勞を憚る勿れ and good results from the struggle. 人生勞せざれば功なし。

すべしこの調子である。もつてその全豹を推すことが出來よう。

註(一) この臺本となつたものは、高橋誠一郎先生が上掲二著に示されている通り、スコットランドのエジンバラで、ウィリアム

およびチェンバースが出版したChambers's Educational Course 中の一冊教科用の經濟書 (Political Economy for use in schools, and for private instruction) 袖珍判百五十四頁のものである。私は高橋先生の藏書一八七三年版を拜借して、本文の説明を試みた。

(二) Chambers's Miscellany of Instructive & Entertaining Tracts, new and revised edition (no date). 10 vols. の中にもスチーヴンソンの傳がある。

(三) 神田孝平の「經濟小學」(一八六六年 反譯一八六七年)は英人義理士すなわちウィリヤム・エリスの *Outlines of Social Economy*, 1st. ed., 1846. の一八五〇年版を七年後に公けにせられたオランダ譯から重譯したもので、(高橋先生の上掲書六二―六三頁)福澤先生はこれを「チャンプル」の原書と對比して見て、「其實第二段に載する所と略相似たれば畢竟又大同小異の書に過ず因て余は本書中首の一段を譯し其餘經濟論の詳なるは姑く聞して之を小學に譲れり、故に此書を讀む者は必ず經濟小學と參考して始て全鼎の眞味を知る可し」(外篇題言)としたのである。

(四) 慶應義塾福澤先生研究會編「福澤諭吉の人と思想」(岩波書店 昭和十五年、三田政治學會誌第九號昭和九年十二月より再録)七四頁。上掲「學問のすゝめ」昆野氏解題中にもこれを引用して、原書との對比を試みてある。

#### 四

西洋事情が廣く行われたことの理由の一つは、福澤の文章が平易であつたからである。このことは福澤のすべての著述についても言える事であるが、福澤みずから言う如く「自分の文章は最初から世俗と決心し、世俗通用の俗文を以て世俗を文明に導くこと……何處までも世俗平易の文章法を押通し、世俗と共に文明の佳境に達せんとするの本願にして會て初一念を變じたることなく」、「兎に角、通俗に分りさへすれば夫れにて宜し」(「福澤全集緒言」、以下明記なき引用はこれによる)という態度であつて、「行文の都合次第に任せて遠慮なく漢語を利用し、俗文中に漢語を挿み、漢語に接する

に俗語を以てして、雅俗めちやくに混合せしめ、恰も漢文社會の靈場を犯して其文法を紊亂し唯早分りに分り易き文章を利用して通俗一般に廣く文明の新思想を「傳えようとするものであつた。その源はいうまでもなく、その師緒方洪庵の訓戒に基くものであつて、精々難解の文字を避け、ついに極端なる「漢學蔑視」の態度にまで邁進するに至つたのである。かく福澤が「俗文主義」を唱えて、飽くまでこれを固執し、これを實踐したのも、福澤が文章の上における「掃除破壊」を試み、デモクラシーへの「建置經營」へと一步を進めたものであつた。デモクラシーは萬人のもの、誰にも分る文章と用語に苦心したことは、著しい卓見であつて、今日改めて當用漢字、新假名遣などが問題になるのが可笑しい位で、彼は率先すでにその主旨を實踐していたのである。

その譯語新造語に、並々ならぬ苦心が積まれたことは「全集緒言」にも處々に散見し、石河幹明氏もたびたび説いてゐるほどであつて、當時としては中々理解し難い「自由」と「通義」の譯語にはずいぶんと苦心を拂つたようで、「リベルチ」(liberty)とは自由と云ふ義にて漢人の譯に自立、自專、自得、自若、自主宰、任意、寛容、従容、等の字を用ひたれども未だ原語の意義を盡すに足らず」(二篇例言)として、種々の解釋を述べてある。「自由」のこの新造語は今日通用するも、折角 right の譯語として苦心された「通義」は今日は全く廢れて權利という文字に代つてゐる。その他西洋事情中には今日から見ると面白い言葉が澤山ある。例えば立君定律(立憲君主)、血統の君主(世襲君主)保任安穩(信用爲替問屋(銀行)銀座手形(銀行小切手)港運上(税)運上所(税關)官許の運上(鑑札)仕官(任官)仕用(使用)本價(元價)基則(規則)通法(通則)飛脚印(印紙)飛脚屋(郵便局)など今日の我等には耳遠い言葉であり、福澤も終りの二語に對し郵の字に氣付かず、帳合が簿記の字に思い及ばなかつたと悔いてゐるのであるが(全集緒言)觀念の形なきとこ

ろに影の文字を求めるとは、雪を知らざる暑地の人々に雪の詩を作らせるようなもので、「遂に自から古を爲し、新日本の新文字を製造したる其數亦尠からず」と自負しているが、我等は今日彼の苦心を意識することなく當然のことの如くにそれ等を使用していて怪まないのである。

また面白い話の一例として「蒸氣機關」(全集第一卷三三二—三三三頁)の項を抜萃すれば、

「蒸氣とは湯氣なり湯氣に力あることは、鍋、釜、鐵瓶に湯を沸かして其蓋を吹上るを見て知るべし、今一合の水を沸騰せしめ次第に火力を強くして其水全く蒸發し盡くるに至れば一石七斗の蒸氣となる。即ち千七百倍の容(かさ)なり、蒸氣機關とは斯く非常に膨脹する蒸氣を捕へて密器中に封じ其發力を藉りて機關を動かすものなり」と説き起し、その機關の構造作用を説明し、ついでその歴史と應用を述べ、最後に「職人は唯機關の運轉に注意するのみにて嘗て手足を勞せずして一人の力を以て數百人の工を成し其費元は少くして其製作は美なり、蒸氣機關一と度び世に行はれてより世界中、之が爲めに工作貿易の風を一變せりと云ふ」とて産業革命の原因にまで叙及している。當時としては實に破天荒の新知識であつて、その前半は今日でも少年少女の科學的讀み物としても面白いのである。

しかし福澤が第一回渡米の際、米人の案内で諸方の製作所、施設などを見物し、米人の考ではそう云うものは日本人の夢にも知らない事だろうと思つて見せて呉れたところのものは、すでに日本において研究し盡され知つていたのでさほど驚かなかつた彼も、物價の高いことには驚かされ、社會上政治上經濟上の事は一向分らなかつた(「福翁自傳」一〇八一—一〇九頁)、そのために、彼は渡歐後もこの點に注目し、西洋事情は著わされた譯であるが、その序文において、洋外の文學技藝を攷究するのみで、その各國の政治風俗如何を詳かにしなければ、實益なく却つて有害でさえもあるとし、

「各國の政治風俗を觀るには其歴史を讀むに若くものなし、然れども世人夫の地理以下の諸學に於て其速成を欲するが爲めに、或は之を讀むもの甚稀なり、實に學者の缺典と云ふべし」(卷之一小引)と歴史を重く見ているのは、漸く有形の學から社會科學へと着目せられるに至つたものであつて、西洋事情の第三部としての二篇に英國版ブラックストンの英法を抄譯した「人間の通義」と共に、ウェーランドの經濟書第四篇 Of Consumption の第三章 Of Public Consumption を抄譯した「收稅論」を加えて、備考として第一卷に充つるに至つたのである。

米人ウェーランドの經濟書は、再三再四、復讀して漸く其の義を解するに及び、每章毎句、耳目に新たならざるもなく、絶妙の文法、新奇の議論、心魂を驚破して食を忘るゝに至つたほどの愛讀書で、(高橋先生の前掲書 七〇―七二頁)、かつ福澤が第三回の海外渡航に際し豊富に買入れた義塾の教科書中の一つで、一八六八(明治元)年の戦争當日、新錢座の新塾舎において、はるかに上野の砲聲を聞きながら先生が講義をつづけられ、日本國中、苟も書を讀んでいる處はたゞ慶應義塾ばかりであるとして、この塾のあらん限り大日本國は世界の文明國であると叫ばれた記念すべき書物である。この書は今も義塾圖書館に保有せられている。<sup>(四)</sup>

それから抄譯せられた「收稅論」中人民を教育するが爲めに財を費す事を説いた意見は、我國の現状から見て、なお傾聽すべく興味あるものがある。その中の一節に、

今日のアルバイト學生と授業料問題についても言いうるように思われるのは、「只貧書生を惠むのみにて之が爲め學校一般の教授料を賤くす可らず譬へば教授の給料貴くして甲某の自力を以て其教授を受ること能はざるときは之を扶助して教育を授くべし、是れ天下の美事なり、然れども貧者は只甲一人にして乙丙丁の學生は皆至當の教授料を納むべき



ものなれば貧生一人の爲め他者の學費を減ずるの理なし」(全集第一卷五七九頁)と説き、教師には相當の高給を支拂うべきであるとして、「教師に與る給料は其人の才學と器量とに従ひ多寡あるべし。」(同上五七八頁)「生徒の學費を納ること極めて少なければ教師の給料を受るも亦極めて少なるべし、故に其教授の品位も亦極めて賤しからざるを得ず、今五兩の金を以て廿五兩の布帛を買ふの術ありとて自から誇張するものあらば、人誰か之を愚と云はざらん、若し此の如き愚人あらば試に其所欲に従て其物を買はしむべし、遂には自己に之を發明せん、抑も五兩の金を投じて買ひし物は果して五兩の價より貴からざれば、人民教育の價に於ても之に異なるなし、教師の給料或は一年五百「ドルラル」(今日の弗)のものあり、或は一千「ドルラル」なるものあり、或は二千乃至三千「ドルラル」なるものあり、然るに今五百「ドルラル」の金を投じて三千「ドルラル」の教師を使役せんと欲するは、豈大なる謬誤に非ずや、試に問ふ此金を以て此人を使役し果して意の如く事實に行れ得る乎。天下古今未だ會て此の如き妙計あるを聞かず。」(ウェーランド原書四〇三頁)「只管教育の冗費を減ずるを以て旨となすときは、教育の分量は増すと雖ども、其品位は下落せざるを得ず、譬へば何等の品物にても其品位下落するときは、隨て之を求むるものも減ぜざるを得ず、故に其品の美ならざるのみならず、遂には其分量をも併せて減少するに至るべし」(割註略)「前論に反して天下衆人の力を用る所、教育の法を修め其風俗を正すに在らば、自然其品位を貴くして人心を鼓舞し、學に志すもの多く、學問の風規を興張し、其教を蒙らんと欲するもの日増月進するが故に、唯教育の品位を貴くするのみならず、其分量をも併せて大に亦増加すべし、故に云く、人民教育の法は其價の廉ならんより寧ろ其品の美ならんを貴とす」(同上五八〇―五九〇頁)と。今日とは時勢も社會思潮も異なるけれども、味うべき言葉である。

- 註(一) 先生が緒方洪庵の塾にいて、オランダ語の文法に精通しその難文を解釋することを最も得意とする洪庵が、反譯の一段に至つてはすこぶる放膽であつて、原書を見ずに反譯原稿のみを添削しているのを傍見し、かつ蘭人ベルの築城書を反譯していた際、「今足下の反譯する築城書は兵書なり兵書は武家の用にして武家の爲めに譯するものなり、就ては精々文字に注意して決して難解の文字を用ふる勿れ(中略)漢書を譯するに難字難文を用ひんとすれば唯徒に讀者の迷惑たる可きのみ、故に反譯の文字は單に足下の知る丈けを限りとし(中略)高の知れたる武家を相手にすることなれば返すも六かしき字を弄ぶ勿れ云々と」訓戒せられた。先生は深くこれを心に銘して曾て忘れたことがないと述懐せられ、「余が著譯の平易を以て終始するは誠に先生の賜にして今日に至る迄無窮の師恩を拜する者なり」としている。
- (二) 漢學者高谷龍洲から正文としての漢文を學べと勸告された後、わざと戯れに「三十一谷人」なる印を彫らせたほどで、いふまでもなく三十一を一字にすれば「世」の字となり、同様に谷人も「俗」の字となるのである(全集緒言)。
- (三) 「文章用語の注意」(諭吉傳第一卷四六二—四六七頁)および「福澤先生の文章」(福澤全集第十卷六九八—七〇二頁)。
- (四) 慶應義塾に傳統の一を加えた由緒あるこの書は、*The Elements of Political Economy. By Francis Wayland, D. D., President of Brown University, and Professor of Moral Philosophy. Fortieth thousand. Boston, Gould and Lincoln, 1866* である。右肩に志田氏圖書記、左下に福澤氏圖書記、ウラ扉に安藤藏書の朱印があり、安藤次郎氏から慶應義塾圖書館へ寄贈せられたもので、一八五六年の第三版も、廣告文を除き内容は同一である。右の要約版 *Francis Wayland, Elements of Political Economy, abridged and adopted to the use of schools and academies, by the Author, Tenth Thousand, Boston, 1871 (1st. ed. 1837)* も亦塾の教科書として用ゝられ、慶應義塾圖書館と慶應義塾之印と二個の藏書印の押されたものが現存してゐる。